

第30回日本受精着床学会

2012.08.30-31 大阪

流産周期と同一周期で得られた余剰胚を移植しても流産リスクは高まらない

医療法人 三慧会 IVF なんばクリニック

大浦 朝美、佐藤 学、赤松 芳恵、前沢 忠志、姫野 隆雄、大西 洋子、井上 朋子、伊藤 啓二郎、中岡 義晴、森本 義晴

【目的】

着床した胚のうち5~40%は妊娠初期に流産となる。苦しい不妊治療の未成立した妊娠が流産となった場合、次回の妊娠が再び流産となる不安を訴えられることがある。特に、流産周期と同一周期で得られた余剰胚（以下 流産同一周期胚）を次回以降使用することに抵抗を感じる患者も少なくない。本研究では流産同一周期胚を移植した場合の出産率、死産率、胎嚢確認後の流産率、子宮外妊娠率ならびに化学的流産率に変化があるか予後を調査した。

【方法】

体外受精にて全胚凍結後、2003年10月から2010年12月に一部を融解胚移植（368周期）後に妊娠成立するも流産となり、残りの凍結胚を融解胚移植した486周期の出産率、死産率、胎嚢確認後の流産率、子宮外妊娠率ならびに化学的流産率について調べた。2010年1月から12月に卵巣刺激周期で得られた胚を用いて凍結融解胚移植を行った895周期を対照とした。

【結果】

流産同一周期胚移植と対照の平均年齢は流産同一周期胚移植の方が有意に低かった（35.3歳 vs. 35.8歳, $P < 0.05$ ）。また、出産率（33.1% vs. 32.2%）、死産率（0.6% vs. 0.3%）、胎嚢確認後の流産率（7.4% vs. 9.9%）、子宮外妊娠率（0.6% vs. 0.3%）、化学的流産率（10.5% vs. 9.3%）で、いずれも統計的有意差はみられなかった。

【考察】

流産同一周期胚を移植してもその予後は対照と差はなく、対照との年齢差を鑑みても流産同一周期胚移植で再び流産となる確率に変化はないことが示唆された。また同一周期で得た胚でも質や染色体異常の有無など均一ではないことが考えられ、流産同一周期胚も移植の価値が十分あると考えられた。